



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第41回 日本語教育方法研究会 立命館アジア太平洋大学 2013年9月21日(土)

今年は日本全国で記録的な猛暑が続いていますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今回の第41回研究会は下記の通り、立命館アジア太平洋大学で開かれます。例年より1週間遅い日程ですので、多少は暑さも和らいでくれるのではと期待しています。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 川村よし子

TABLE 1 第41回研究会開催について

日時 :	2013年9月21日(土)
会場 :	立命館アジア太平洋大学 H棟 1F・2F
開催委員 :	本田明子 (立命館アジア太平洋大学) 寺嶋弘道 (立命館アジア太平洋大学) 金庭久美子 (事務局、横浜国立大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付(発表者・一般) ポスター貼付	1:30	報告 俵山雄司氏(群馬大学) 「日本語教育方法研究会と実践研究」
10:00	開会の挨拶	1:45	口頭発表開始
10:05	会の進め方の説明	2:45	ポスターセッション開始
10:10	口頭発表開始	4:15	ポスターセッション終了
11:00	ポスターセッション開始	4:30	講評
12:30	ポスターセッション終了 昼食・休憩 (学食受付13時まで) 午後のポスター貼付		次回開催委員挨拶 閉会の挨拶 参加者全員で片付け
		4:45	懇親会

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらっしゃってください。非会員の方でも会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入(p.12 参照)にご協力ください。

新規入会 : 3,000 円 (年会費)

当日のみ参加 : 2,000 円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 音声教育や日本語教員養成における音声学について日本語教師が考えていること—現状と課題を探るためのパイロット・スタディー—

阿部新（名古屋外国語大学）・嵐洋子（杏林大学）・木原郁子（聖学院大学）・篠原亜紀（国際交流基金）・須藤潤（同志社大学）・中川千恵子（早稲田大学）

発表者らは、日本語教師による発音の指導方法や日本語教員養成における日本語音声学の教育方法をよりよくするために、国内外の様々な経歴の日本語教師を対象として、ビリーフ（言語学習に対する考え方）に関するアンケートを実施した。発表では、本調査に向けて行ったパイロット・スタディーの結果から、ビリーフ項目（外国語学習一般や音声教育の方法・内容について）と回答者の教育の経歴や背景等との関係を分析した。その結果、ビリーフは語彙重視、文法重視、文字・発音重視の3つのパターン、回答者は4つのグループに分かれた。4つのうち2つは上級担当で発音重視のグループで、残りの2つは入門担当で発音を重視しないグループであった。

2. レポート作成と口頭発表の学習プロセスの分析—各学習者に応じた柔軟な活動デザインと支援のために—
中井陽子・鈴木孝恵（東京外国語大学）

各学習者のレポート作成と口頭発表の学習プロセスを分析し、記憶、認知、補償、メタ認知、情意、社会的といった学習ストラテジー（Oxford 1990）使用の実態を明らかにする。教師の観察記録、学習者へのインタビュー調査を基に分析した結果、各学習者の学習プロセスは、①先導タイプ、②遅延タイプに分けることができた。①先導タイプの学習者は、認知、補償、メタ認知、社会的ストラテジーを駆使して各課題を確実にこなし、②遅延タイプの学習者は、特に、社会的ストラテジーで他者の助言・支援を受けつつ、他のストラテジーを補完していく様子が見られた。各学習者に合わせた柔軟な活動と学習ストラテジーの活用ができる環境作りの必要性を考察する。

3. プロジェクト型サービス・ラーニングの実践報告

井上里鶴（筑波大学大学院生）

教育改革におけるサービス・ラーニング（以下、SL）に関する連合体（Alliance for Service-Learning in Education Reform）は、SLを「地域社会における現実的な課題を解決するために、生徒が新しく獲得した学問的な技能や知識を活用できるような場面を保証する一つの教育方法」と定義している。本稿は、都内日本語学校の中上級日本語学習者を対象に行なった「プロジェクト型 SL プログラム」の実践を報告する。プログラムの概要を紹介するとともに、Can-do リストによる学習者の自己評価およびグループインタビューの結果をまとめた。その結果、「話す」能力、特に「自分の意見を述べる」ことに自信をつけた者が多かった。また、さまざまな社会の価値観への気づきから、社会の中の自己を再認識した様子も伺えた。

4. 「地域社会により順応するための方言教材」の開発—教材開発のプロセスとロールプレイ談話の結果を中心に—

吉里さち子（立命館アジア太平洋大学）・嵐洋子（杏林大学）・大庭理恵子（熊本県立大学）・大山浩美（奈良先端科学技術大学院大学）・甲斐朋子（大阪大学大学院生）・田川恭識（早稲田大学）・馬場良二（熊本県立大学）

本研究グループは、地方在住の日本語学習者が地域社会により順応できるようにするための方言教材の作成とその方法論の構築を目的とし、これまで熊本方言初級教材を作成した。現在、これに続いて、「心地よい地域共通語」を学ぶことのできる中上級方言教材の作成を進めている。教材作成に先立ち、様々な年代の、多様な社会的属性を持つ熊本方言話者が、日常どのような言葉を用いてコミュニケーションを行っているのか、実態を明らかにするため、自然談話と様々な場面を想定したロールプレイ形式の談話を収集した。本発表では、教材開発のプロセスと、ロールプレイ形式の談話から得られた結果を中心に発表する。

5. 口頭発表時の質疑応答において無音声時には何が行われているか—理工系分野の留学生を対象に—

仁科浩美（山形大学）

口頭発表後の質疑応答は、発表者が聴衆からの質問やコメントに返答したり、質問者と意見交換をしたりする場であるが、音声が発せられない、いわゆる沈黙の時間がしばしば見受けられる。本稿では、大学院留学生の質疑応答を対象とし、発話の無音声時における留学生の行動・動作を分析した。その結果、スライドを探すパソコン操作で会話が途切れる長い無音声時間が見られる一方で、「ジェスチャーを使う」「向きや立ち位置を変える」「質問者を見る」といった1秒未満の非言語コミュニケーションが頻繁に用いられていることがわかった。また、次の発話への間合いをとるためと思われる無音声時間があることも示された。

●ポスター発表（上記5件を含む20件）

6. 地域社会は日本語学習者に何を求めているのか—アルバイト先での半構造化インタビューの SCAT 分析から—

松井一美・板橋民子・吉里さち子（立命館アジア太平洋大学）

日本語学習者は地域社会の一員として、アルバイトやボランティア活動などを行っている。本研究は、学習者が地域社会の中で円滑に活動を続けていくためには、何が必要なかを明らかにすることを目的とする。調査方法として、実際に学習者を受け入れているアルバイト先の担当者などに半構造化インタビューを行い、SCAT を用い分析した。その結果、業種によって求められる日本語力は異なることが分かった。また、業種に関わらず当該の組織が求める文化への適応力や、相手への気遣いなどが評価されることが明らかとなった。さらに、学習者との関わりから日本人の側にも異文化に対する関心が生まれるなど意識の変容がみられた。

7. 初年次アカデミック・ライティングクラスのための構造積み上げ型教材の開発と学習者評価

藤浦五月（武蔵野大学）・中川祐香（大阪産業大学）

留学生約 100 名に行った質問紙調査の結果、約 8 割の留学生が 1 年生の前期からレポートを課されているにもかかわらず、最初のレポート課題までにレポートを通して書く練習をしたことがある学生はわずか 3 割であることがわかった。本発表では、初年次から何度も通して書くことを徹底した構造積み上げ型教材を取り上げ、レポート全体構成の早期習得の必要性について考察する。N3 から N1 レベルクラスでそれぞれ 1 年半試用を重ねた結果、学習者のレベルに合わせながらもレポート全体構成についてはほぼ同一レベルの習得が確認できた。学習者の自己評価アンケートから導き出された今後の課題についても併せて検討する。

8. 漢字圏中級学習者は漢字熟語の「撥音の後の h/p 交替」をどう意識しているか—「漢字音」学習タスクの開発を目指して—

前原かおる・増田真理子・菊地康人・藤田朋世・渡部みなほ（東京大学日本語教育センター）・副島昭夫（麗澤大学外国語学部）

漢字熟語には「先 (sen) + 発 (hatsu) → 先発 (senpatsu)」のように、漢字 1 字の基本音を、形態素境界で音交替させて読む場合がある。発表者らはこれまで、このうち「促音化に伴う h/p 交替」（例：出 (shutsu) + 発 (hatsu) → 出発 (shuppatsu)）について、漢字圏学習者（主に中級レベル）の理解度を観察してきたが、今回は、新たに「撥音に後接する h/p 交替」について調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。1) 「撥音+p」は、「促音+p」に比べても「撥音+k,g,b,h」に比べても難しい、2) h/p だけでなく h/b や k/g という音交替もあるかのように思っている学習者がいる、3) 「撥音+p」であるところを「撥音+b」と誤認するケースが多い（その逆は少ない）。本発表の分析により、タスク開発のための示唆を得た。

9. 共起表現に重点を置いた上級レベルの語彙指導のための教材作成

金森由美・坂井美恵子（大分大学国際教育研究センター）・中溝朋子（山口大学留学生センター）

「名詞+助詞+動詞」という連語における名詞とその共起表現を学ぶための教材を紹介する。この教材で学習するのは旧日本語能力試験 1・2 級レベルの名詞 120 個で、それらを 20 のトピックに分けて、まず名詞と共起する動詞の中から「現代日本語書き言葉均衡コーパス」において使用頻度とダイス係数が高く異なる状況を表現するものを選び連語のリストを作成した。次に各連語の典型的な修飾語を明示するために使用例を付けた。そしてこれらの連語の意味と使い方を確認し習得するための練習問題を準備した。学習者はこの教材を通じて名詞を中心とした様々な表現を学ぶことができる。今後は ICT を利用したブレンディッドラーニングへと発展させて

いく予定である。

10. 会話データ分析研究を活用した日本語教員養成課程の授業実践の分析—接触場面における問題の分析力と対応能力の育成をめざして—

大場美和子（広島女学院大学）

本研究では、日本語教員養成課程に位置づけられる授業「言語とコミュニケーション I」において会話データ分析の研究論文を活用し、接触場面の意識化、接触場面の問題の分析力と対応能力の育成を目指した授業の実践について、授業で活用した会話データ分析の研究論文と受講生の課題カードの記述から分析する。授業では、主に、日常生活では意識されにくい接触場面のコミュニケーション行動の問題の現象を文献中のデータを活用して提示し、その現象を受講生が分析してディスカッションを行った上で、意見を課題カードに記述する形で進めた。受講生の課題カードから、授業の目的が概ね達成され、会話データ分析を活用した授業の効果も観察された。

11. 即時訂正フィードバックの効果—初級日本語授業におけるビデオ撮影を利用した方法の考察—

浅岡信義（立命館アジア太平洋大学）

言語習得における気づき（Schmidt, 1993）の重要性が唱えられているが、教室で学習者同士、または教師からの様々な訂正フィードバックが行われ、学習者がそれを正当に認識していないことも多い（e.g., Lyster & Ranta, 1997）。本研究は、2013 年春学期を通して初級日本語学習者同士のペア会話を手軽な iPhone でビデオ撮影、その場で再生し、教師による訂正フィードバックを行った。学習者に即時的可視化で会話を客観的に観察させ、気づきを促し、理解へと繋げた。学期末アンケート調査から認識理解度を分析し、ビデオ撮影を活用した即時訂正フィードバックの有効性を考察する。

12. ビジターセッションで期待されるビジター像—立命館アジア太平洋大学のケースから—

高尾まり子・井上佳子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美（立命館アジア太平洋大学言語教育センター）

日本語母語話者を教室に招くビジターセッションは、人的リソースを用いた活動の一つとして様々な日本語教育の場で取り入れられている。しかし、実際に学習者がどのようなビジターを望むかは明らかにされていない。そこで、立命館アジア太平洋大学の日本語学習者 373 名を対象に質問紙調査を行い、さらにそのうちの 10 名にインタビュー調査を行った。質問紙調査の結果、日本語学習者が求めるビジター像はレベルや国籍だけではなく、教室外での日本語使用時間や日本人の友達の数、将来の進路などによっても異なることがわかった。また、インタビュー調査からは学習者が求める具体的なビジター像やそれを求める理由が明らかになった。

13. 中級以上の中国人日本語学習者における「対のある自他動詞」の習得状況

安欣欣（横浜国立大学大学院生）

中級以上の中国人日本語学習者を対象として、日本に滞在歴のある学習者とない学習者とに分け、日本語における対のある自他動詞の習得状況を調査した。その際、形態素の十パターンを基にした語彙判断テスト 30 問と、形態論・意味論・語用論レベルの問題を中心に誤用が出やすい文法項目テスト 25 問、の二つの調査を行った。その結果、語彙判断テストではいずれの学習者も動詞対の片方を書く問題が難しく、文法項目テストでは日本に滞在歴のある学習者はそうでない学習者より語用論の範疇において成績が高かった。これらの結果を踏まえて、学習者の日本語のレベルや日本に滞在した経験などの要素を考慮し、学習者の習得状況に適した指導につなげたい。

14. 母語の発音の痕跡がなくなるための音声教育の実践

河野俊之（横浜国立大学教育人間科学部）

近年、より高い日本語の発音能力が求められることが多くなっている。そこで、本研究では、母語の発音の痕跡がなくなるための音声教育の実践について報告する。まず、韓国人学習者本人に発話資料を読ませ、それを分析した。そして、それに基づき、フィードバック及びメタ言語的な練習を行った。また、他の韓国語話者の日本語発音を聞かせ、その誤りを分析させた。その結果、目標となる音声について考えるだけでなく、学習者自身の現在の発音を内省することを含め、自己モニターを活用することとアクセント規則の正しいストラテジーを身に付けることが重要であることが分かった。

15. レベル差のある日本語中級クラスにおける授業運営

古川明子（早稲田大学日本語教育研究センター）

中級日本語授業でレベル差のある学生が混在するクラスで、満足度の高い学びのある授業を成立させる方策を探る。一般にレベル差のあるメンバー構成においては場が「サロン化」という実態を耳にする。ただし「サロン」とは自由な会話を楽しむ場であり、日本語上達や、議論・思考を深めるといった志向性は求められていない。自由闊達な雰囲気を保ちつつ、授業で行われるべき学びを実現させるには、教師がファシリテーターとして学びの場を演出することが必要である。発話を促す情報の提示、ピアラーニングを志向する場の提供、学生自身が気づき納得し学習できるコミュニティーの構築などを目指し実践された方策を、授業記録から振り返り、検討する。

16. 教育に対する教員のビリーフが学習活動の取り組み方に及ぼす影響—ビジターセッションを例に—

本田明子・石村文恵・小森千佳江（立命館アジア太平洋大学言語教育センター）

本発表では、大学の留学生教育において、大学生ビジターと、年配者中心の地域住民ビジターという 2 種類のビジターセッションを経験した教員を対象としたアンケートによるビリーフ調査とインタビューの結果を分析し報告する。調査の結果、教員は大学生のビジターには、学習者と同じ学生として、共に学ぶことを期待しており、日本の文化の知識などへの期待は低い。年配者を中心としたビジターには、日本文化の知識や学習者への理解などを期待しており、期待にそぐわないビジターに対し厳しい評価をしていることがわかった。本研究では、このような教員のビジターに対する期待の違いがビジターセッションの効果に及ぼす影響について述べる。

17. 中国語母語話者の動詞語彙産出—9人の学習者の事例から—

森山仁美（久留米大学大学院生）

これまでの研究から、中国語母語話者の発表語彙知識は、「語形」と「意味」の語彙知識と比較し、「使用」面の語彙知識は少ないことが予測される。そこで、本研究では、中国語母語話者対象に、意味を認識し漢字で産出することのできる語彙（語形と意味）と文脈の中で当該語を正しく産出できるか（使用）を検討する。研究方法として、中国語母語話者9名を対象に3級レベルの動詞を使用し2種類のテストを実施した結果、「漢字で書けるのに文脈の中で正しく産出できなかつた」語が43語中28語確認された。このことから、語を認識し正しく綴る知識が早く習得されるのに対し、文脈の中で適切な語を検索し使用する知識は遅いことが確認された。

18. 中上級での母語話者との交流授業—実際への橋渡しの試み—

清水昭子（人民教育出版社課程教材研究所）

中上級の学生は、あるトピックについてまとまった長さで話しそれについて話し合う能力が要求される段階である。しかし、このような「話し合いをする」という機会は日常生活ではあまりない。また、この「話し合いをする」は初級の文練習と同じように回数を重ねる必要があると同時に、実際の使用のためにはその練習が現実味を帯びていなければならない。発表者は、中上級の授業に交流授業を取り入れることにより、授業内での練習を増やし、現実感を持たせる工夫を行った。その結果、学習者同士の会話でのお互いの協力関係が生まれた。また、母語話者の素直な反応の中から実際の接触場面に対する心の準備が生まれた。

19. 中国語教育に立脚した日本語指示詞の教授方法

野中仁（京都外国語大学大学院生）

本研究は中国語指示詞（“这”、“那”）と日本語指示詞（「これ（此れ）／この（此の）」、「あれ（吾れ）／あの（吾の）」、「それ（其れ）／その（其の）」）とをそれらの語が使用される状況の分析を通して得られた結果を用いて、日本語指示詞の使用基準を明らかにすることを目的としたものである。本研究の根源には日本における中国語教育の立場があり、従来中国語指導法では防げなかつたような日本人学習者が陥りやすい誤りを防止することを目的とした研究が基盤として存在している。本発表ではそこから得られた情報を活用し、中国語を母語とする日本語学習者にとって理解しやすい教授方法を提示することを試みる。

20. 岡山大学全学日本語コースのカリキュラム改善について

内丸裕佳子・坂野永理・森岡明美（岡山大学言語教育センター）

近年岡山大学の日本語コースでは、従来の研究生や大学院生に加え、交換留学生の数が増加し、受講生の多様

化が進んでいる。本コースでは毎年カリキュラムの見直しを行ってきたが、この度、多様な受講生のニーズに対応するため、大規模なカリキュラム改編を行った。この改編の大きな特徴は、従来の総合クラスに加え、さまざまなレベルに対応したトピック別の選択クラスを開講し、受講生の状況や興味に合った科目数と科目内容の選択を可能にしたことにある。本発表では、改編前に行ったニーズ調査とカリキュラム改編の経緯、改編前と改編後のカリキュラムの相違点、改編後に行ったアンケート調査の結果、今後の改善点について述べる。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

21. 看護師談話の分析を応用した教材作成の試み—引き継ぎ報告「申し送り」を対象に—

永井涼子（山口大学留学生センター）

本発表では看護師による引き継ぎ談話「申し送り」を、日本人向けの申し送りのマニュアルと比較分析した結果を応用し、教材を作成した試みを発表する。実際の病院で録音された申し送りのデータと、マニュアルの談話例を比較した結果、情報に見出しをつける、結論から述べるなど、情報の伝え方には共通点が見られたが、接続詞の使用、「んです」「ている」などの文末表現など、使用する具体的な言語表現には相違点が認められた。そこで本発表ではマニュアルに実際の談話との相違点を盛り込んだ形での外国人看護師向けの申し送りの教材開発を行った試みを報告する。

22. 日本語自然習得者の談話における話題展開

山田野絵（筑波大学留学生センター）

本稿は日本語を自然習得した非母語話者が、接触場面においてどのような話題展開を行っているかを実際の談話から質的に分析し、その特徴を明らかにすることを目的とする。分析結果から、日本語自然習得者の話題展開の特徴として（1）「新出話題の連続」（2）「同一話題の繰り返し」が認められた。また、聞き手である母語話者の参加態度が、コミュニケーション成立に重要な役割を果たしていることも示唆された。今後、日本社会において共生社会を実現していくために、接触場面に関連した研究は極めて重要である。本稿で得られた知見は、接触場面における非母語話者・母語話者双方のコミュニケーション能力育成に寄与するものと考えられる。

23. ペアワークを中心とした会話練習におけるインターアクション観察（2）—「プレインフォーム」の学習プロセスを観察する一環として—

河内彩香・増田真理子・中原なおみ（東京大学日本語教育センター）

発表者らは、中原他（2013）において、学習項目の埋め込まれたモデル会話を基に、新たな会話を学習者ペアが作成する活動の実際について、ICレコーダーによる録音記録を分析し、教室内の構成員のインターアクションによって、モデル会話のコンテキストが拡張されていくダイナミックな様子を報告した。本発表では、こうした活動における「学習項目自体の学び」の実際を観察するために、「プレインフォーム」をターゲットとする活動を題材に、学習者が「と思う」「ので」「んですけど」におけるプレインフォームの形式と用法を獲得していく過程を分析した。その結果、プレインフォームの学習における学習者の誤用タイプ、教師の介入が必要な誤用と自己修正が可能な誤用の類別が観察された。

24. やさしい日本語書き換えシステムの基本設計

渡邊飛雄馬（筑波大学大学院生）・川村よし子（東京国際大学）

共生社会へ向けて、防災や医療関係等の様々な分野で、難解な日本語を平易な日本語に書き換える必要性が高まっている。そこで、こうした日本語の書き換えを自動で行う、やさしい日本語書き換えシステムの開発を行った。本システムは、難解な日本語に対応するやさしい日本語を列挙した「やさしい日本語書き換えリスト」に基づいて単語置換、表現置換を行う。その際、異なった品詞への置き換えにも対応し、適切な活用や音便処理を行うとともに、助詞・助動詞等の置換も自動で行える仕組みを整えた。その一方で、書き換え候補が複数存在する場合には、バルーンを用いて表示することにした。本研究の成果は Web 上で公開する予定である。

25. 生活者としての外国人児童を対象とした教材『バスに乗ってみる』の作成と試用

渡部真由美（日本国際協力センター）・俵山雄司・牧原功・結城恵（群馬大学）

群馬県では、主たる移動手段が自動車であるため、バスの利用経験がない児童は少なくない。本取組は、こうした状況を踏まえ、外国につながる子どもの学習支援を行っているボランティア教室と連携し、バス利用に必要な基本的知識や一連の行動を体験的に学ぶ教材を作成し実践した。その結果、学習したことを意識しながら集団でバスに乗るという所与の目的を達成することができた。加えて、高学年の児童が低学年の児童をサポートしたり、保護者の了承のもと一部の児童がバスを利用してボランティア教室に通うようになったりするなど、児童の間に学習の副次的効果も確認された。

●ポスター発表（上記5件を含む20件）

26. アニメを活用した日本語授業の提案—上級学習者を対象とした実践授業—

村松佑紀（横浜国立大学大学院生）

今日、世界の多くの国でアニメやマンガが日本語学習の動機付けとなっており、アニメやマンガを活用した授業も増加している。筆者もアニメを活用した授業実践を行ってきたが、上級学習者から「アニメから日本語を勉強したい」「アニメに出てくる新しい単語を教えて欲しい」などの意見があげられた。学習者のニーズにあい、また学習者が満足できる授業を行うため、アニメからどのようなことが教えられるか考察し、様々な授業活動を考案した。アニメはインターネットサイト上で無料視聴できるアニメを活用し、日本語学校にて上級学習者を対象に実践授業を行った。授業後のアンケートでは、学習者から高い評価を得ることができた。

27. 視覚教材による相互交渉の促進—初級会話授業での試み—

斉木ゆかり（東海大学）

初級レベルの会話授業において、学習者の自発的な発話や学習者同士の相互交渉を実現させるために教師は何ができるだろうか。市販、あるいは学習者が作った絵カードを使って物語を作るという活動を行った。この活動の発話を分析した結果、教科書中の単語や表現を使用するだけでなく、偶発的習得語彙の使用、確認・繰り返し要求・疑問提示・提案などが認められた。この活動によって、自発的な発話や相互交渉の促進がされたと考えられる。

28. ベトナムにおける学部編入留学のための日本語教育—専門科目につうじる土台づくりの実践—

川崎香織（東京語文学院日本語センター）

筆者は、日本への編入留学を目指すツイニングプログラムにおいてベトナム人学生に日本語教育を行なった。しかし彼らのバックグラウンドや知識的土台は日本のそれとは大きく違った。そのため日本では広く知られている基本的な理系の知識や科学的な考え方を教える必要があった。それは専門的な日本語ではない。授業では、学生は説明や図表作成に取り組んだ。結果として学生は専門科目の土台となる日本語や考え方を学んだ。この実践を通し、筆者は教科書の作成が必要であると考えた。教科書は学部別程度に分かれ、課題を主としているとよい。また多くの文系出身教員のために「教師用指導書」も必要である。

29. 日々の授業で行えるコミュニケーションのための音声指導—『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』の会話部分の補助教材—

渡部みなほ・田川恭識・神山由紀子（早稲田大学日本語教育研究センター）・小西玲子（泰日経済技術振興協会付属日本語学校）

円滑なコミュニケーションを行う上で自然な音声の習得は重要である。しかし、現行の日本語教育では十分な音声指導が行われているとはいえない。これまで筆者らは総合的な日本語クラスで日常的に音声の指導が出来るよう、単語やフレーズを単位とし、アクセントにも留意した教材「ことばシート」を作成してきた。しかし、会話レベルでの自然な音声表現の習得を目指す場合、筆者らの教材では不十分である。そこで、『みんなの日本語』の「会話」を活用した教材「会話シート」の作成に着手した。この教材は、意図や感情を適切に伝えるための音声表現への意識を高め、その習得を促すことを目的とする。本稿では、教材作成の経緯と概要について述べる。

30. ディクテーションによる音声知覚トレーニングの実践と課題

小河原義朗（北海道大学）・高橋亜紀子（宮城教育大学）

聴解過程の中でも特に音声知覚段階のトレーニングとしてディクテーションはその有効な手段の一つと考えられる。そこで、初級教科書を終えた段階で初級レベルの聞き取りが弱い学習者に対して、教師が音声ファイルを所定のウェブサイトアップロードし、そこから学習者が各自のPCにダウンロードし、学習者が各自のペースでそのファイルを再生しながら文字に書き起こす形式のディクテーションを取り入れた聴解クラスを試みた。トレーニングとしての効果は見られる一方で、学習の効率性と継続性をさらに追求したトレーニング・システム構築が課題である。

31. 中国における初任日本語教師の教育観の変容—スピーチ大会への取り組みを通して—

潘寧（大阪大学大学院生）・菅田陽平（華東師範大学外国語学院）

本研究は中国の地方大学に赴任した初任日本語教師を対象に、「スピーチ大会への取り組みを通して起こった教育観の変容のプロセスを記述すること」を研究目的としたものである。結果として教師はスピーチ大会への参画を単に学習者の日本語を指導する機会と考えるだけではなく、日頃の学習の成果を発揮する場が乏しい地方都市の意欲ある学習者に機会を創出する試みと考え、やりがいを見出すようになっていった。また振り返りを通じて、教師自らの力量も高められる機会であると捉えた。なお教師の教育観の変容は教師自身の経験にとどまらず、スピーチ大会へ参加した学習者の意見にも大きく影響されたことが明らかになった。

32. ケース教材を用いた討論活動からの学び—クラス討論の分析から—

宮崎七湖（早稲田大学日本語教育研究センター）

発表者は大学に所属する留学生を対象に、問題発見解決能力と表現力の育成を目指し、ケース教材を用いた日本語の授業を実践した。ケース教材というのは、問題発生の経緯と当事者の心情が物語的に書かれている教材を指す。この授業で行ったグループ討論とクラス全体討論の録音を分析した。その結果、学習者が討論を通して、他者の視点へ気づいたり、自分とは異なる意見やアイデアを受け入れたりしながら、ケースに関する理解や考えを深め、よりよい解決法を導き出す過程を確認することができた。以上から、ケース教材を用いた討論活動は、学習者の問題発見解決能力を育成につながる可能性があると考えた。

33. 短期「ものづくりマネジメント」コースのための日本語教材開発

高井美穂（摂南大学）

摂南大学及び大阪工業大学では、タイの協定大学において工業経営を専攻する学生を対象として、日本語及び「ものづくりマネジメント」の約5週間のジョイントプログラムを実施している。前半は摂南大学で日本語を学び、後半は大阪工業大学で「ものづくりマネジメント」を学ぶ。本発表では、摂南大学における日本語研修のための初級教材開発について報告する。本教材では、1)基本的なコミュニケーションができる、2)安全に関する諸注意が理解できる、3)ものづくりマネジメントコースで使用される語彙や漢字が理解できる、の3点を到達目標とし、作業や改善といった場面を軸に、各場面で必要となる機能、講義資料から抽出した語彙を組み合わせ構成した。

34. 初級学習者の会話における接続表現の使用—予備教育修了時の学習者に対する OPI から—

堀恵子（筑波大学）

国費留学生対象の予備教育修了時点での熟達度を測ることを目的として、Oral Proficiency Interview (OPI) を行い、そのうち3名の学習者を対象として事例分析を行った。接続表現に注目すると、初級レベルの学習者と比較すると、中級学習者1名は接続表現の種類が豊富で、使用数も増加しており、一方誤用は産出してないことが明らかになった。さらに学習者が使用している教科書に取り上げられている引用表現の「って」の使用も見られた。先行研究が指摘しているような「あとで」の多用と誤用、また「て形」の多用は見られなかった。その理由としては、使用しているテキストの違いによる可能性が考えられる。

35. 地方での介護福祉士候補者への学習支援

相原幹子（九州大学大学院生）

本稿では地方で働く介護福祉士候補者に対し、日本語教師はどのような学習支援を行ったかについて述べる。2008年に第1陣看護師・介護福祉士候補者が来日し、その後も候補者は来日している。候補者は病院や介護施設で働きながら国家試験を目指している。首都圏では地域で連携して候補者の支援が行われているところもあるが、地方の候補者は必ずしもそのような支援を受けられるわけではない。では地方ではどのような学習支援が行われていたのだろうか。本稿では地方の介護福祉士候補者に対し、日本語教師はどのような学習支援を行い、その際どのような問題を感じたのかを明らかにする。

36. Moodle を活用した日本語教員養成向け e ラーニングコンテンツの開発と授業改善—言語一般および言語と教育を中心に—

篠崎大司（別府大学）

本研究は、Moodle を活用した日本語教員養成向け e ラーニングコンテンツの開発とその授業実践および授業評価について報告した篠崎(2013)の続報であり、学習コンテンツの追加と授業方法の改善点について報告するものである。具体的には、1. 講義資料 (PDF) を新たに 20 項目追加 (全 65 項目)。2. 1 に伴い内容確認のための「10 分 10 問チェックテスト」の一部修正。3. 「10 分 10 問チェックテスト」の完了締切を授業当日から次回授業の前日までに延長。の 3 点である。あわせて、本コンテンツによる授業実践の概要についても報告する。

37. 意見文における効果的な「譲歩」とそうでない「譲歩」

工藤嘉名子・伊集院郁子（東京外国語大学留学生日本語教育センター）

工藤・伊集院 (2013) は、超上級レベルの学習者の意見文に見られる「譲歩」の機能とその出現位置を特定し、意見文の序論・本論・結論の各部に相応しい「譲歩」の論理展開パターンを明らかにした。本研究では、先行研究の結果を教育現場に応用するために、超上級レベルの意見文に出現する「譲歩」について、自論の正当性を強化する上で効果的かどうかという観点から質的分析を行った。その結果、①自然な「譲歩」と唐突な「譲歩」、②反論材料が適切な「譲歩」と不適切な「譲歩」、③簡潔な「譲歩」と長すぎる「譲歩」という、効果的な「譲歩」とそうでない「譲歩」の 3 つの対とその典型例を特定した。

38. 協働作業を通じた理解構築の過程の分析—ニュースの視聴から伝達へ—

衣川隆生（名古屋大学）

筆者は中上級日本語学習者を対象に、学習者がグループで時事的な話題を含んだニュースを視聴し、協働でその内容を理解するという教室活動を実施した。その活動の翌週には異なったニュースを視聴した学習者とペアになりそれぞれが視聴したニュースの内容を伝え合う活動を行った。本研究では、これらの活動で観察されたやりとりから、学習者がどのような言語的、視覚的、対話的リソースを手がかりに理解を深めているか、そして最終的に理解した内容をどのような表現で伝えているかを分析した。その結果、最初は画面に現れるテロップやアナウンサーの言語表現をリソースとして字義的な解釈を行なっているが、協働の過程で相互の知識や経験を引き出し、背景となる状況の解釈にまで至っていることがわかった。

39. 「オタク」は日本語学習とどのように結びつきうるか—日本語・日本文化研修生を対象に—

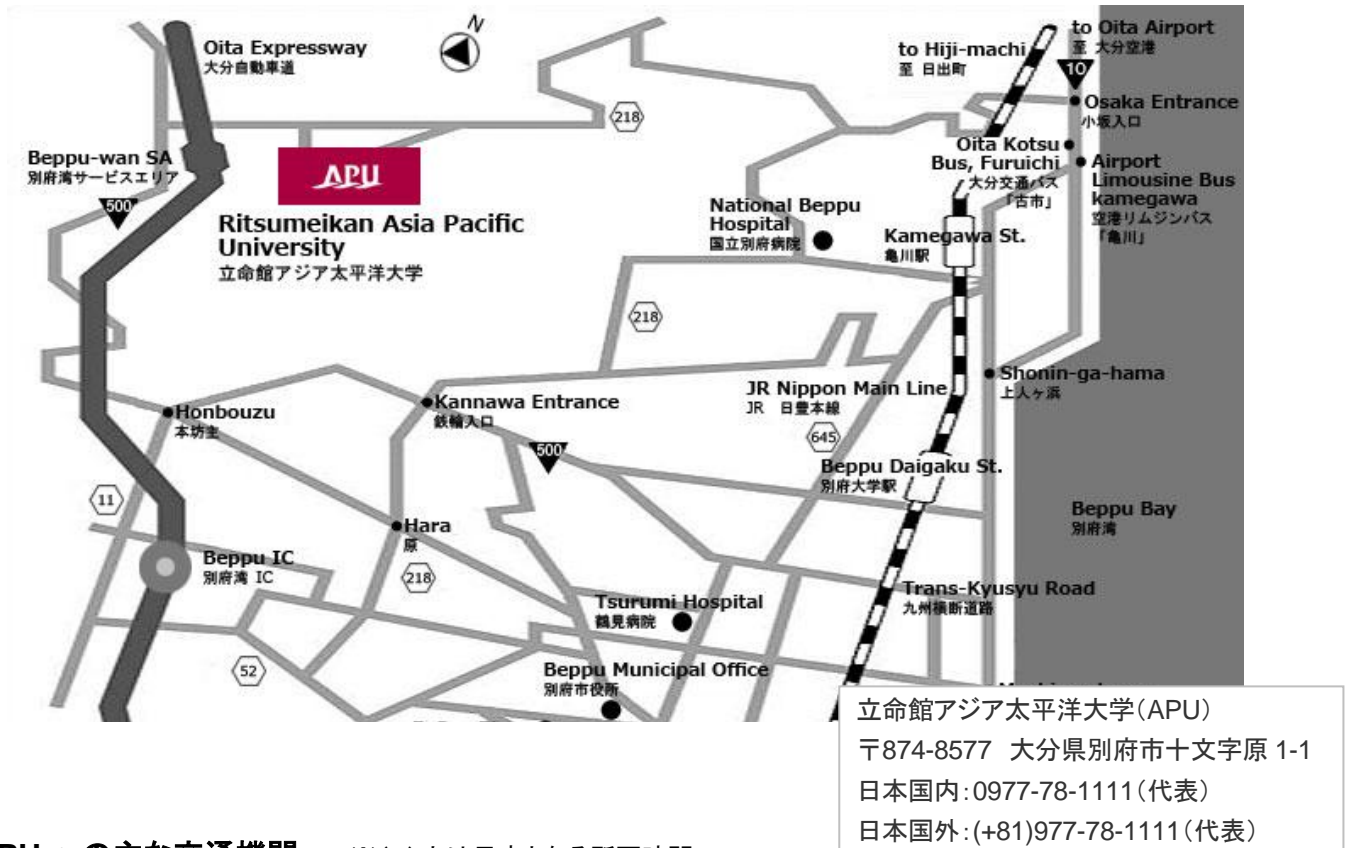
小林由子（北海道大学国際本部留学生センター）

日本語学習者には、いわゆる「オタク」志向が強い者が存在する。この「オタク」性は学習とどう結びつくのだろうか。本発表では、海外で日本語を専攻し 1 年間日本で研鑽する日本語・日本文化研修生を対象に、「オタク」であることが日本語学習とどう結びつきうるのかについて検討する。発表者は、「オタク」志向の強いテーマを選択した日研生に対し、ゼミ形式でレポート指導を行った。対象者は、「オタク」志向の強い仲間や教員との議論を通じ、主に表現論的・社会学的な知見を深め良質のレポートを執筆することができた。「オタク」であることは、より深く学ぶための糸口となりうる。今後、その学びについて、より検討されることが必要である。

【会場案内】

立命館アジア太平洋大学

<http://www.apu.ac.jp/home/contents/access.html>



APU への主な交通機関 ※ () 内は目安となる所要時間

JR 亀川駅より

大分交通バス「立命館アジア太平洋大学」(終点)下車(15分)

JR 別府駅より

東口より 大分交通バス「立命館アジア太平洋大学」(終点)下車(35分)

西口より 亀の井バス「立命館アジア太平洋大学」(終点)下車(35分)

大分空港より

空港リムジンバス「エアライナー」にて「亀川(古市)」下車(30分)

⇒乗り継ぎ(反対車線のバス停「亀川(古市)」)より、大分交通バス「立命館アジア太平洋大学」(終点)下車(15分)

JR 博多駅・福岡空港より

高速バス「とよのくに」にて別府湾 SA 内「高速別府湾・APU」下車 (博多バスターミナルからは 140 分、福岡空港国際線からは 100 分)

○県外から別府へのアクセス

JR 東京/大阪/名古屋 —(山陽新幹線)— 小倉 —(日豊本線)— 別府/亀川

飛行機 東京(羽田)/大阪(伊丹)/名古屋(中部国際) — 大分空港

フェリー 大阪南港 — 別府国際観光港

愛媛八幡浜港 — 別府国際観光港

【昼食について】

学内のカフェテリアとコープショップが営業しています。発表の教室、休憩室で持参の飲食も可能です。

- ・ **カフェテリア (E棟1階)** **営業時間 11:30-13:30** (学食受付13時まで)
 麺類 (ラーメン、うどん、そば)、焼きたてパン、カレー、丼、メインディッシュ (170円~270円中心)、
 各種惣菜もの (60円~100円)、サラダバー、ハラルメニュー、その他。
- ・ **コープショップ (EII棟1階)** **営業時間 10:00-17:00**
 弁当、サンドイッチ、おにぎり等の軽食の販売

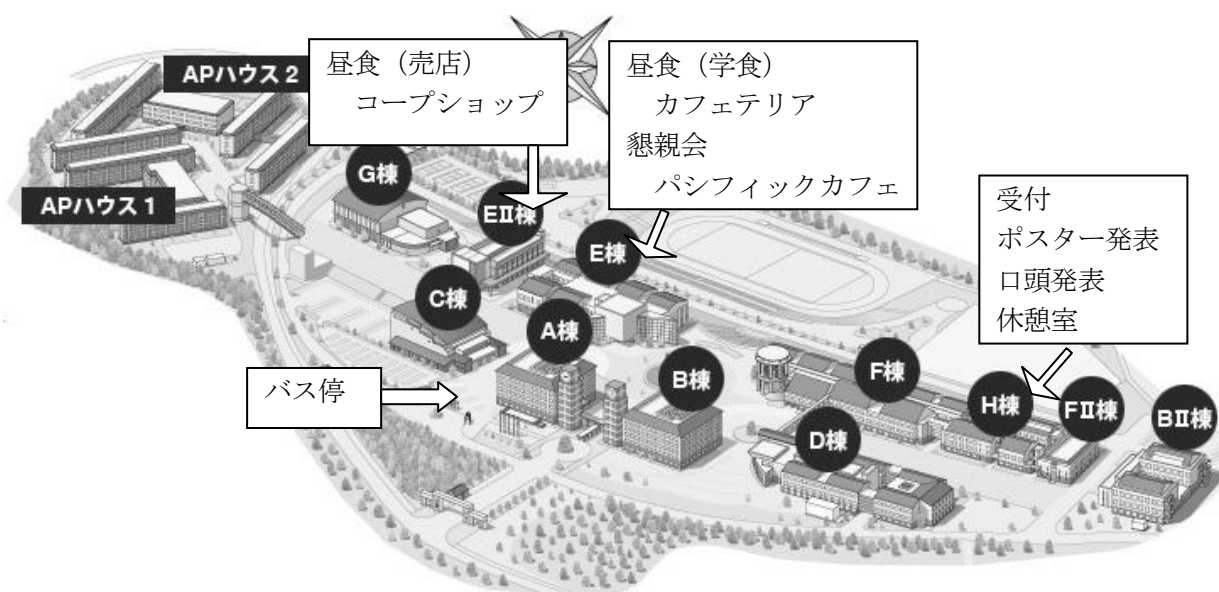
大学の外には、飲食店、コンビニエンスストア等はありません。学内の店舗をご利用ください。

【懇親会】

閉会の挨拶の終了後、パシフィックカフェ (E棟1階) にて懇親会を行います。

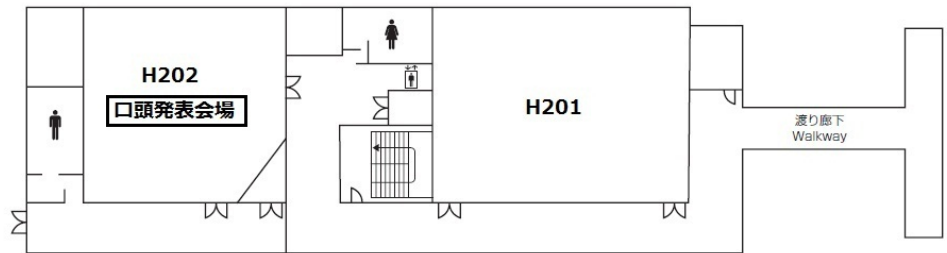
ぜひご参加ください。会費は2500円です。

○キャンパスマップ



○会場内案内図

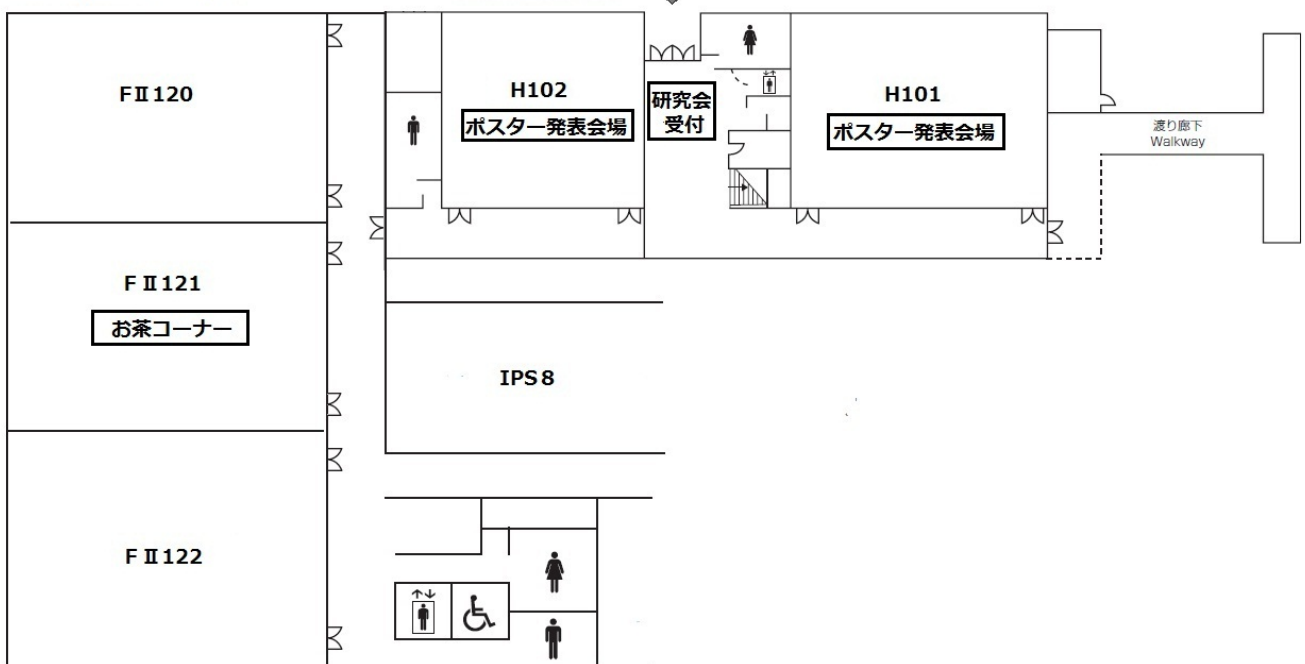
大学院棟 (H棟) 2F



教室棟Ⅱ (FⅡ棟) 1F



大学院棟 (H棟) 1F



【会費納入のお願い】

JLEM では1月から12月までを会計年度としております。2013年度会費(3,000円)未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がありましたら、jlem-ml#tiu.ac.jp (#は@です)までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号: 10140 番号: 69076511 加入者: 日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名: ゆうちょ銀行

店名: ○一八 店 (ゼロイチハチ店) 金融機関コード: 9900 店番: 018

預金種目: 普通 (または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号: 6907651

口座名: 日本語教育方法研究会